

タイトル：2018 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.12)

日時：2018年11月30日（金）15:00～17:35、12月1日（土）10:30～13:05

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Impact of Women-Owned Small Business on Familial Relations in Contemporary Algeria”

山本 沙希（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 博士後期課程）

報告内容

本報告では、現代アルジェリアの首都アルジェにおいて自宅を基盤に経済活動に従事する女性零細事業主を事例に、家庭内における既存の関係性及び性役割認識に仕事及ぼす作用について考察分析した。なかでも、仕事に対して家族が協力的または否定的な反応を示したという女性事業主への聞き取り調査成果を基に、前者については家族の助言や協力が仕事の改善を促し、事業を支え強化する上で家族的ネットワークが機能していると論じた。他方、男性世帯主をはじめ家族の反対に接した場合には、「ムスリム女性としての働く権利」を主張し説得したと語る対象者の事例に触れながら、女性は時間の経過やライフイベントに応じて異なる複数の役割を意識しており、家族との交渉の場面では優位性のある役割を取捨選択し、自身の選択に正当性を与えるため特定の役割を引き合いにしていると指摘した。また事業主であるという性質上、女性の専門技術及び稼得手段の獲得は家庭内での交渉の余地を広げ、夫婦間の役割分担にも一定の調整を促している。女性が働くことへの家族の反応は総じて多様だが、仕事や収入管理に対する自身の意思決定を貫き、仕事を通じて家族との既存の関係性にある程度の変化を生じさせている点においては共通している。いずれも家事・育児負担を母＝妻としての「義務」と関連付け強く意識する傾向はみられる一方で二項対立的なジェンダー関係に依存しているのではなく、家庭内で合意に達するよう日常的に説得や交渉が行われており、夫婦間の役割認識も調整可能な側面があると結論づけた。

ディスカッションの概要

コメンテーターの Yusuf Sidani 教授（ベイルート・アメリカン大学）からは、既婚女性の事例に焦点を当てていた本報告に対し、独身女性の事例にも特化して分析することの必要性和、これまで聞き取り調査を行ってきた対象者を複数の特徴に分類し、分析するためのコード化の作業を分析手法としてご提案いただいた。さらに、他のマグリブ諸国を含めより広い視野で俯瞰し、課題を共有し得る議論を導くことを今後の課題としてご助言いただいた。Paul Balanfati 教授（ガラタサライ大学）からは、女性の就労状況に関する統計データ分析をふまえること及び家庭内における女性の収入の用途状況や調査対象者への聞き取り内容については丁寧な確認作業が求められるとのご助言をいただいた。統計データ分析やコード化については作業を進めてきた課題でもあるが、婚姻状況別に整理する視点や聞き取り調査によって得られたデータの扱い方については今後改めて検討したいと考えている、

会議参加の感想

本報告会への参加を通じて得られたなによりの収穫は、研究発表に対するフィードバックを専門地域や分野の異なる国外の先生方からいただき、改めて自身の研究内容を見直す機会が得られたことである。また報告会の場以外においても、折に触れて国内外の先生方や他の若手研究者の方々と議論する機会を得られ、地域や分野を超えて多角的な視点をもつことの重要性を認識した。このような貴重な機会を与えて下さり、本報告会の実現に向けてご尽力いただいた黒木英充先生、近藤信彰先生、錦田愛子先生、事務局の千葉様をはじめ、ご支援くださった全ての方々に御礼を申し上げたい。